

無症状病原体保有者の考え方

無症状病原体保有者の類型

- ① 咽頭にはウイルスは存在したが、その人の免疫により発病に至らない場合
- ② 感染初期であるために、いまだ症状が出ていない状態
- ③ 以前に症状があったが、現在は症状が消失し回復途上にある場合
- ④ 本来は病原体を有していないが、検査の特性上陽性となった場合（擬陽性）*

* 検査の性質から疑陽性はほぼない。検出限界以下の場合、検査では陰性になるので偽陰性はあり得るがこれは感度の問題である。また、プライマーおよびプローブの標的配列に変異があれば感度低下し、偽陰性の可能性が増加する。

無症状病原体保有者の考え方

無症状病原体保有者への対応について

- ① 感染させる可能性は完全には否定できないが、同人の免疫機能により、ウイルス量の増加は抑えられているため、感染性は低いと思われる。
- ② 感染したウイルスが感染すると、原則的には潜伏期間内に発症するため、経過観察を適切に行い、症状の出現をとらえることが重要。また、症状が出現していない場合は、ウイルスの排出量が少ないことが予想され、感染させる可能性は完全には否定できないものの、感染性は低いと考えられる。
- ③ 新型コロナウイルス感染症は、無症状であっても他人に感染させる可能性はあるが、同様の理由により無症状の場合の感染性は低いと考えられる。
- ④ 配列が一致し、増幅される必要があるため、擬陽性の可能性は極めて低い。